

方丈記 第四回

また、治承四年の水無月に、都が突然に遷都される事態になった。まったく、思いもしなかったことで、都の始まりについて、おおよそ私が知っているのは、嵯峨天皇の時代に京に都を定めたといいことで、すでに四百年以上もの歳月が経っている。それをわざわざ変える理由も見当たらなければ、変えるにしたところまで決して簡単なことでもない。

世の中の人々にすれば、一体どうしてだろうと不安にもなり、また何かと心配の種にもなる、全くもって理由が分らず、ものごとの道理を逸脱するにも程がある。

ただそうは言っても、それをどう言うてみたところでどうなるものでもない。帝をはじめ、大臣や公家などもみな、長岡の新しい都のほうに遷られてしまった。治世を司る人たちなのだから、一人くらいはみな故郷でもあるこの京の都に残ろうとする人がいても良いはずと思うのだけれども、誰もが官位のことしか気にかけて、上司の力を頼んで顔色を窺う方々ばかりで、一日も早く、我先に新都に移り住もうと躍起になる始末。

そんな時勢に乗り損ね、世間からも見捨てられて、出世の望みなどない方だけが、明日を憂えながら都にとどまっているけれども、そんなわけで、競い合って建てた立派な家々も、主がいなくなれば当然のこと、次第しだい、日が経つにつれて荒れはてて行く。

そんな家のなかには、解体され、柱などの建材が、淀川に浮かぶ船の荷となるものもあり、そんな壊された家の跡地も、あつという間に畑に変わる。そんな次第で、いつのまにやら人の心も変わってしまい、大切にするのは馬や鞍ばかり。そうして美しい住まいや暮しが意味を失って行くなかで、優雅な牛車なども無用のものになってしまった。

なかにはいつそ都を出て、どこかほかの場所へと転勤を願う方々もいるけれども、そういう人はみな西南海、九州や紀伊や淡路や四国などの温かな地を望むばかりで、遠い東や北の荘園の荘官になりたがる人など誰もいない。